『万葉集』における体言止めについて

ー歌謡とのかかわりからー

岩　田　久美加

For substantive in " Manyo "
− the perspective of ancient songs and ballads −

Kumika Iwata

（平成27年12月１日受理）

Ttraditional Japanese poetry has the rhetoric called the termination with a substantive. We had indication that it was used a lot for the beginning in the Kamakura era conventionally. However, there is the traditional Japanese poetry of the termination with a substantive to "Manyoshu" in a considerable ratio. The appeal for others is important, and the function is different from the 31-syllable Japanese poem which is at the beginning of the Kamakura era in a property. The function of such a termination with a substantive is common with the function of the termination with a substantive in songs and ballads. While the traditional Japanese poetry of "Manyoshu" is based on the style of ancient songs and ballads, the reason that such a tendency produced is because it was a process to change into the 31-syllable Japanese poem which became independent which there is not of depending on the shown environment.

1.　はじめに

うたは，その長さに関係なく―例えば，長歌であろうと短歌であろうと―結句において内容が完結する。従って，結句は，動詞・形容詞・形容動詞・助詞・助動詞など述語となる語句で通常結ばれる。しかし，うたの中には，結句が体言で結ばれるものがあり，それは，体言止めと呼ばれている。体言止めについて，『和歌文学大事典』[i]は，「短歌の第五句の終わりの文節に体言を用いる修辞法」であり，「『万葉集』から見」られ，「歌人の間で意識的に用いられ，かつ飛躍的に増大したのは新古今時代」であり，体言部の叙述には「倒置法によって表現されるもの」と「省略されるもの」があり，後者が八代集を通じて最も多い用法で，「体言が感動語となって余情や余韻を豊かにするものである」とする。これは，『新古今和歌集』を中心に考えた場合の体言止めの効果であると思われる。そもそも，『万葉集』に多くおさめられている長歌に関して，それらの結句を体言で結ぶ場合は，体言止めとはよばないのであろうかという疑問が生じる。

そこで，まず，体言止め全体の研究史を概観しながら『万葉集』の体言止めのうたが，どのように位置付けられてきたかを確認し，問題点を明らかにする。

2.　研究史概観と問題の所在

体言止めに関しては，柏木由夫[ii]により八代集の体言止めについてまとめられている。それを参考に，本稿も大まかではあるが，体言止めの研究の時代的変遷をまとめる。

管見の限り，橘守部[iii]が，『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』について，「実語[iv]」という名称を用い，句切れとの関係からその位置を検証し，「かゝれば此實句どめは，新古今の時代の人の歌どもより多く成そめたるにこそ」と指摘しているのがはやい。以後，１でふれたように，『新古今和歌集』の特徴として，本歌取りや三句切れなどとともに辞書や注釈書の概説に記されることが多く，その表現効果として，うたに余情・余韻を与えるものであるとされてきた。

その後，昭和三十年代半ばに，体言止めのうたが，『古今和歌集』以後どのように変化するかを精緻に検証する方向へと研究は向かい，武内章一[v]らが，二十一代集の各歌集内での体言止めのうたと総歌数と全体に対する割合を算出した。それは，『古今和歌集』から『詞花和歌集』までは『後撰和歌集』の四・一％を最下位として，全て一〇％以下であるのに対し，『千載和歌集』が一三·四％，『新古今和歌集』が二三・六％であり，十三代集ではほぼ二〇％を超える（最高は『風雅和歌集』の二九・七％）ことを指摘し，従来『新古今和歌集』において強調されてきた体言止めは，それに続く十三代集以後も引き継がれるものであることを明らかにした。また，四季・恋・雑に分けると体言止めの増加は特に四季のうたにかたよることを指摘した。なお，この論は，長歌・旋頭歌・連歌などの歌体も扱うが，「ナクニ止め」や係り結びで最終句が連体形の場合は除いている。次いで中性哲[vi]が，体言止めに用いられている語句を内容的に五分類（植物語·動物語·天象語·地儀語·人事語）し，三代集では人事語，『後拾遺和歌集』·『金葉和歌集』では地儀語，『詞花和歌集』·『千載和歌集』·『新古今和歌集』では天象語が優位であると指摘した。そして，第五句に，その作品の主題となる語が含まれることはほとんどなく，天象・地儀に関する語を除いては，結句のみが主題を示すのではなく，主題の雰囲気を作り出す手段となるにすぎないか，主題が表現されるための場面と機会を提供するかなど従属的な意味を示し，言わば体言止めの修辞法自身が主題の朧化表現・余情表現の効果を主としている以上やむをえないとした。また，人事語関係の情緒語や呼び掛け語などは，三代集を中心にたまたま見られるが，体言止めの中心的な用法ではないとした。

次いで，昭和四十一年に，森重敏[vii]と田辺正男[viii]の論が，相次いで発表された。森重敏は，うたの各句を単位として捉えた。そして，体言止めの句は，『万葉集』では主語的で，『古今和歌集』から『金葉和歌集』までは述語的であり，前者は語的，後者は文節的であるのに対し，『新古今和歌集』では主述的・文的であり，一首は文相当の二つの句が相関する形式であり，その関係は飛躍的な断続関係にあるとした。一方，田辺正男は，体言止めの句の一首に対する文法的役割から，『万葉集』·『古今和歌集』·『新古今和歌集』の短歌について，独立語·感動文·疑問文・主語・述語などに十分類し，体言止めのうたは，『万葉集』は短歌全体の約六％，『古今和歌集』は短歌全体の約五％を占めるのに対して，『新古今和歌集』は約二五％を占めるとし，実用的・会話的なものから，余情・余韻を求めるものへと歴史的展開があるとした。なお，「～もの」で止めた場合や，ク語法，「～さ」をつけて名詞化したものは除いている。

昭和五十年代に入ると，田部井喜久枝[ix]が田辺正男の十分類を修正し，八種類（①くり返し型・②呼びかけ型・③主語述語型・④倒置型・⑤感動文型・⑥述語用言省略型・⑦二文遊離型・⑧掛詞型）に分け，①～④は時代が下がると衰えるのに対し，⑤は『風雅和歌集』に至って特に多くなり，⑥～⑧は『新古今和歌集』において盛んになる傾向があることを指摘し，それは，伝達性の大小にあるとした。また，高田昇[x]により『万葉集』における体言止めの本格的な研究が行われた。『万葉集』·『古今和歌集』·『新古今和歌集』の短歌を対象に，体言の種類や句の構造について比較し，『万葉集』では，用いられる体言の種類に関しては，人に関するものが多く，また，「～さ」で終止するものが『古今和歌集』·『新古今和歌集』に比して多いとした。第五句の構成の特徴としては，『古今和歌集』·『新古今和歌集』に比して構造が非常に多岐にわたっており，命令法・禁止法などの終止的用法を上に持つ体言終止は，『万葉集』独自の表現で，用いられる体言はほとんどが「吾妹」「吾が背」に限られる『万葉集』の慣用的パターンであるとした。また句切れと第五句の構造については，主格を受けるものは句切れがなく，終止的用法を上に持つものは，第四句で句切れるものが多いと指摘した。なお，短歌のみを対象として，『万葉集』は約四二〇〇首の中に体言止めのうたは二七七首，『古今和歌集』は五三首，『新古今和歌集』は四四五首であるとしている。ここから，稿者が算出した高田論文が想定する各集における体言止めのうたの割合は，『万葉集』は六・六％，『古今和歌集』は四・八％，『新古今和歌集』は二二・四％である。

そして，柏木由夫[xi]が，昭和六十年代に入って，体言止めの問題点を二点にしぼり，それまでの問題点を総括した。まず，文法的構造については，八代集の体言止めのうたをａ感動語・ｂ主語・ｃ連用修飾・ｄ呼びかけ・ｅ原因・理由・ｆその他の六分類し，時代下がるに従って，体言止めのうたが歌集内総数に対して次第に増えても，おおまかには各グループが同じように増大していることを指摘した。更に一貫して最大率を示すａの感動語形の多くを占める句切れのない体言止めのうたは，その下句の各句の連接は，『後拾遺和歌集』以後で，連用修飾と連体修飾か，接続関係と連体修飾という二通りの場合が中

心となり，それは各句の独立性と一首の外枠としての構造の確立を示し，内容の複雑化や自由化をもたらし，それはまた上下句の独立，つまり三句切れに近い構造を内包する形になってゆく過程を示しているとした。また，句切れのある体言止めのうたは，単純に上下を結びつけることは出来ず，独立性の高い上下句の内容解釈の結果，多くを読者の推測によって補い関連づけられるものが少なくないとした。一方，体言止めのうたの第五句と歌末語の語彙については，第五句が「名詞＋の＋名詞」となる形式は時代が下がるに従って集中することを指摘し，その名詞を時・物・場の三つに分類すると，三代集では，前の名詞が時・場・物のいずれが示されても末尾の名詞が物となって一首が終わる形式が主であり，『後拾遺和歌集』では新たに時から場の名詞に続く形式が登場し，『新古今和歌集』では場や物から時に続く形式が加わり，形式の上でも詠歌対象の上でも充実しているとした。そこから形式上の推移をより単純化して見るならば，三代集時代は物重視形で，それが『後拾遺和歌集』で新たに場重視形と時重視形となり，『新古今和歌集』では時重視形が一層充実するとした。

以後，稿者が見る限り，個々の歌集に関する体言止めに関する論考は散見するが，通史的な視点から正面から体言止めを論じた論や，『万葉集』の体言止めについて言及するものは殆どない。従って，この柏木論文が，体言止めの研究の一つの到達点を示していると言えよう。

以上より，いくつかの問題点が浮かび上がる。まず，体言止めという技法は，和歌でのみ用いられるのではなく，歌謡においても用いられているにも関わらず，見て来たように管見の限りでは，歌謡の体言止めに関する研究はなく，『万葉集』の長歌の体言止めに関する研究も殆どない。これは，研究において，体言止めが，『万葉集』の中心的技法ではなく，歌謡においては技法としても認識されてこなかったためであろう。しかし，「書くうた」がやっと成立したばかりの上代においては，以前拙稿[xii]で述べたように，『万葉集』中にも歌謡性の高いうたが含まれているなど，和歌と歌謡というようにジャンルをはっきり分けて考えるのではなく，和歌も歌謡も包括するうたという視点を持つことが必要であろう。

従って，次章以後，『万葉集』の体言止めのうたを具体的に分類し，通史的な視点から，盛んに用いられた『新古今和歌集』までのうたの流れの中で『万葉集』の体言止めのうたはどのように位置づけられるのかを検討する。その一方，共時的な視点から，『古事記』『日本書紀』などのうたの体言止めとどのような関係があるのかを考えることを通して，『万葉集』のうたの特徴を指摘したい。

3. 『万葉集』の体言止めと『古今和歌集』・『新古今和歌集』の体言止め

『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』の体言止めのうたの割合を，次の表１[xiii]に示す。また，五句体である短歌と六句体である旋頭歌を対象とし，他の歌集にあわせて，長歌に関しては，ひとまず対象から除く。なお，ク語法による「～く」という歌末，接尾語「さ」による「～さ」という歌末も体言止めに準じると考え，対象とする。

表１

	総歌数	体言止め	%
『万葉集』	4251	308	7.2
『古今和歌集』	1111	55	5.0
『新古今和歌集』	1983	455	22.9

この表１より，体言止めは，『新古今和歌集』において特徴的だと言われてきた通り，その割合を見ると，『万葉集』における体言止めは，七･二％と，『新古今和歌集』の二二･九％に比べて格段に低い。但し，『古今和歌集』の五･〇％，『後撰和歌集』の四･一％，『拾遺和歌集』の五･五％，『後拾遺和歌集』の七･一％に比べれば，若干高い。なお，『金葉和歌集』は七･九％，『詞花和歌集』は九・〇％の体言止めを有している。

ここから，体言止めは，『古今和歌集』の時代に一度数的には減少し，それから再び『千載和歌集』や『新古今和歌集』の時代に増えることが分かる。この変化は，先行論文らが指摘するようにうたの結句である第五句の構造的・質的な変化と関係あるとするならば，どのような点にあるのかを明らかにするために，うたの構造による分類し，具体的に見ていく。その分類基準は，前掲柏木論文[xiv]による。つまり，体言止めの句が文の中でどのような働きをするかで分けるのである。

a　感動語（～だなあ・～だよ）
b　主語（～は）
c　連用修飾語（～に・～を）
d　呼びかけ（～よ）
e　原因・理由（～のために・～によると）
f　その他（～のように，用言省略等）

具体例を『万葉集』で示す。

a　大き海の水底深く思ひつつ裳引き平しし菅原の里
（⑳四四九一　藤原宿奈麻呂朝臣の妻石川女郎）
b　人ならば母が愛子そあさもよし紀伊の川の辺の妹と背の山　（⑦一二〇九　作羈旅　古歌集）
c　我が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘れ貝　（⑥九六四　坂上郎女）
d　ますらをの行くといふ道そ凡ろかに思ひて行くなますらをの伴　（⑥九七四　聖武天皇）
e　故郷の初もみち葉を手折り持ち今日そ我が来し見ぬ人のため　（⑩二二一六　詠黄葉）
f　住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊まりゆ出づる舟人　（③二八三　高市連黒人）

この分類に基づいて，『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』の体言止めのうたの分類をし，そのうた数を表にすると，次のようになる。なお，カッコの中は各集の体言止めのうたにおけるパーセンテイジを算出したものであるが，小数点第二位を四捨五入したものであるので，総計が百％にはならない。

表 2

	『万葉集』	『古今和歌集』	『新古今和歌集』
a	153(51.2)	26(47.3)	243(53.4)
b	44(14.2)	9(16.4)	74(16.1)
c	30(9.7)	8(14.5)	90(19.6)
d	60(19.4)	5(9.1)	36(7.8)
e	16(6.2)	6(10.9)	12(2.6)
f	5(1.6)	1(1.8)	0(0)

a～fの％が，『古今和歌集』『新古今和歌集』のどちらもほぼ同じである中で，『万葉集』に関して，際立った特徴がみられる。それは，前掲高田論文[xv]も指摘するが，dの呼びかけが，『古今和歌集』九・一％，『新古今和歌集』七・八％と一桁であるのに対し，『万葉集』では一九・四％と高い％を示している点である。

その特徴は，次に例を示すように，人物に対して呼びかけているものが殆どである。

ますらをの行くといふ道そ凡ろかに思ひて行くなますらをの伴　（⑥九七四　元正天皇）
春草は後はうつろふ巌なす常磐にいませ貴き我が君　（⑥九八八　市原王）

これは，『古今和歌集』や『新古今和歌集』の呼びかけの対象が，植物や風などの自然など非人物[xvi]であることと大きな異なりがある。

また，『万葉集』の体言止めの呼びかけの機能を有するうたで，結句の中に句切れがあるものが二八例ある。『新古今和歌集』にはなく，『古今和歌集』にも一例しかない。

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈回に標結へ我が背　（②一一五　但馬皇女）
蜻羽の袖振る妹を玉くしげ奥に思ふを見たまへ我が君　（③三七六　湯原王）
妹らがり我が行く道の篠すすき我し通はばなびけ篠原　（⑦一一二一　詠草）
さ雄鹿のつまととのふと鳴く声の至らむ極みなびけ萩原　（⑩二一四二　詠鹿鳴）
山川を中に隔りて遠くとも心を近く思ほせ我妹　（⑮三七六四　中臣朝臣宅守）

高田論文が指摘するようにこの場合の呼びかけの対象は，「我妹」「我が背」などが多いが，「篠原」「萩原」などもある。

その上，第四句で句切れ，更に結句の中にも句切れがあるものもある。

楽浪の連庫山に雲居れば雨そ降るちふ帰り来我が背　（⑦一一七〇　作羈旅　古歌集）
遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒　（⑦一二七一　行路　柿本人麻呂歌集）
秋の野の尾花が末に鳴くもずの声聞きけむか片聞け我妹　（⑩二一六七　詠鳥）
小墾田の板田の橋の壊れなば桁より行かむな恋ひそ我妹　（⑪二六四四　寄物陳思）
信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましむな沓はけ我が背　（⑭三三九九　東歌　信濃国歌）
大船にま梶しじ貫きこの我子を唐国へ遣る斎へ神たち　（⑲四二四〇　藤原太后）

このように，細かく句切れが存在する例があるのは，『万葉集』と先にふれた『古今和歌集』の体言止めのうた一例にしか見えず，『万葉集』の体言止めのうた特徴の一つと言えよう。

また，「～く」で歌末が終止するク語法止めのうたは，『万葉集』のみ二〇首あり，ク語法止めの中でも特に「ナクニ止め」の一種[xvii]「～なく」で終止するうたも『万葉集』のみ一二首ある。これも一つの『万葉集』の歌末の特徴[xviii]と言えよう。

4. 『万葉集』の体言止めと『古事記』『日本書紀』などのうたの体言止め

次に，歌謡における体言止めを見ていく。『万葉集』と同じように，六句体までの歌謡を対象として見てみると次の表になる。

『琴歌譜』や『続日本紀』の歌謡は数が少なく，数値として高く出がちであるが，表３全体の体言止め

表 3

	六句体までのうたの歌数	体言止め	%
『古事記』	62	11	17.7
『日本書紀』	76	12	15.8
『続日本紀』	6	1	16.6
「風土記」	20	3	15
『琴歌譜』	9	1	11.1
『神楽歌』	83	11	13.3
『催馬楽』	10	2	20

は，二六六首中四二首であり，その割合は一五･八％である。

次に，歌謡において，七句体以上の歌謡（以下，当該論文において長歌謡とよぶ）を対象として見ると次の表になる。

表 4

	歌数	体言止め	%
『古事記』	50	7	14
『日本書紀』	52	11	21
『続日本紀』	2	0	0
「風土記」	20	3	15
『琴歌譜』	12	7	58.3
『神楽歌』	10	1	10
『催馬楽』	50	9	18

記載書物によって長歌謡が含まれる割合が異なるため，数値としてはかなりひらきはあるが，表４全体の体言止めは，一九六首中三七首であり，その割合は一八・九％である。

同様に，長歌謡も含め，体言止めの歌謡の割合を示すと次の表５になる。

表 5

	総歌数	体言止め	%
『古事記』	112	18	14.8
『日本書紀』	128	23	18.0
『続日本紀』	8	1	12.5
「風土記」	20	3	15
『琴歌譜』	21	8	38.1
『神楽歌』	93	12	12.9
『催馬楽』	61	11	18.0

表５全体の体言止めは，四四三首中七七首で，その割合は，一七・七％となり，表３と表４の体言止めの割合はほぼ同じである。ここから，歌謡の句数の長さに関係なく，体言止めの割合あまり変わらないと言えよう。つまり，十％後半の割合になり，表１で示した『万葉集』の短歌及び旋頭歌の体言止めの割合とは開きがあり，体言止めの割合が多いと言えよう。

ここで，歌謡が短歌謡と長歌謡の両方を含みあわせるように，長歌も含めた『万葉集』全体での体言止めの割合を見てみたい。

表 6

	総歌数	体言止め	%
『万葉集』	4516	344	7.6

表１で確認した『万葉集』の短歌と旋頭歌における体言止めの割合が七・二％であるのに大きくは異ならない。

次に『万葉集』の長歌における体言止めの割合を見てみたい。

表 7

	総歌数	体言止め	%
『万葉集』の長歌	265	36	13.6

一三・六％と，表１・２の体言止めの割合と異なり二桁であり，３で考察した八代集における体言止めの割合と比べても高い割合である。

以上より，『万葉集』において，長歌という歌体が体言止めを多く有していることは確認できた。そこで，長歌のように『万葉集』中において，短歌とは異なる歌体である旋頭歌についても見てみよう。

表 8

	総数	体言止め	%
人麻呂歌集出の旋頭歌	35	8	22.9
人麻呂歌集出以外の『万葉集』中の旋頭歌	28	5	17.8
『万葉集』中の全ての旋頭歌	62	13	21.0
人麻呂歌集歌の短歌	333	12	3.6

表８のように，人麻呂歌集の旋頭歌は二二・九％と明らかに体言止めの割合が高い。また，人麻呂歌集の旋頭歌以外の『万葉集』中の旋頭歌も，一七･八％と高く，表１に関連した八代集の体言止めの割合に対しても，三代集の体言止めに比べても高い。つまり，旋頭歌という歌体が，体言止めを有する割合が高いと指摘できよう。それは，同じ人麻呂歌集出の短歌と旋頭歌の体言止めの割合を比べるとよく分かる。人麻呂歌集は，柿本人麻呂の手による歌集であ

りながら，短歌における体言止めが三・六％であるのに対し，旋頭歌における体言止めが二二・九％であるというのは，時代による差異ではなく，歌体による差異であることが明らかであろう。

ここで，『万葉集』中の旋頭歌の体言止めのうたを全て掲げる。うたの冒頭のアルファベットは，表２で分類したａ～ｆに対応する。

d 梓弓　引津の辺なる　なのりその花　摘むまでに逢はざらめやも　なのりその花
（⑦一二七九　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

a 梯立の　倉椅山に　立てる白雲　見まく欲り　我がするなへに　立てる白雲
（⑦一二八二　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

a 梯立の　倉椅川の　川のしづ菅　我が刈りて　笠にも編まぬ　川のしづ菅
（⑦一二八四　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

d 垣越しに　犬呼び越して　鳥狩する君　青山の葉繁き山辺に　馬休め君
（⑦一二八九　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

d 海の底　沖つ玉藻の　なのりその花　妹と我とここにありと　なのりその花
（⑦一二九〇　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

d 江林に　伏せる猪やも　求むるに良き　白たへの袖巻き上げて　猪待つ我が背
（⑦一二九二　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

a あられ降り　遠江の　吾跡川柳　刈れども　また生ふといふ　吾跡川柳
（⑦一二九三　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

山上臣憶良，秋野の花を詠む歌二首

a 萩の花　尾花葛花　なでしこが花　をみなへし　また藤袴　朝顔が花［その二］
（⑧一五三八　山上憶良）

e 射目立てて　跡見の岡辺の　なでしこが花　ふさ手折り　我は持ちて行く　奈良人のため
（⑧一五四九　典鑄正紀朝臣鹿人）

a 高円の　秋野の上の　なでしこが花　うら若み　人のかざしし　なでしこが花
（⑧一六一〇　丹生女王）

b 山背の　久世の若子が　欲しと言ふ我　あふさわに　我を欲しと言ふ　山背の久世
（⑪二三六二　旋頭歌　柿本人麻呂歌集）

a まそ鏡　見しかと思ふ　妹も逢はぬかも　玉の緒の　絶えたる恋の　繁きこのころ
（⑪二三六六　旋頭歌　古歌集）

a み吉野の　瀧もとどろに　落つる白波　留まりにし　妹に見せまく　欲しき白波　（⑬三二三三）

ここから，『万葉集』中の旋頭歌における体言止めは，ａ（感動）が七首（五三・八％），ｂ（主語）が一首（七･七％），ｃ（連用修飾）が〇（〇％），ｄ（呼びかけ）が四首（三〇・八％），ｅ（原因・理由）が一首（七･七％），ｆ（その他）が〇（〇％）である。用例数が少ないが，表２の『万葉集』の分類とほぼ同じで，半数がａの感動で次いで多いのがｄの呼びかけである。但し，短歌にはない特徴が旋頭歌にはある。先に掲げた旋頭歌の体言止めのうたで，結句と同じく語句にはうたに傍線が引いた（波線は結句と類似した表現）。ここから，体言止めの句が一首の中でくり返し用いられている割合が高いことが分かる。このように，結句と同じ表現が同一のうたの中に出ることは，短歌においてはない。しかし，歌謡においては，同じような例を見つけることが出来る。旋頭歌が六句体であることから，六句体以下のうたにおいての例を掲げる。

大君の　御子の柴垣　八節結り　結り廻し　截れむ柴垣　焼けむ柴垣　（記一〇九）

大魚よし　鮪突く海人よ　其が離れば　うら恋しけむ　鮪突く志毘　（記一一〇）

朝霜の　御木のさ小橋　侍臣　い渡らすも　御木のさ小橋　（紀二四）

あたらしき　猪名部の工匠　繋けし墨縄　其が無ければ　誰か繋けむよ　あたら墨縄　（紀八〇）

ぬばたまの　甲斐の黒駒　鞍着せば　命死なましゆ　甲斐の黒駒　（紀八一）

大君の　八重の組垣　懸けめども　汝をあましじみ　懸かぬ組垣　（紀九〇）

臣の子の　八符の柴垣　下動み　地震が揺り来ば　破れむ柴垣　（紀九一）

これは，一首の中での働きが，感動であろうと，呼びかけであろうと，それを説明しなおしていると言えよう。そして，土橋寛[xix]によると前で主題を提示し，後で主題の説明ないしは抒情を表現する脚韻くり返しは，民謡にも見られる，歌謡の方法であるという。また，同じような表現のくり返しは，リズムををうみ，口誦性も高いと考えられる。ここから，旋頭歌の体言止めが，他の『万葉集』以後の体言止めと異なり，歌謡性の高さが窺えよう。

また，六句体までの歌謡の体言止めの分類をすると，ａ（感動）が二四首（五三・八％），ｂ（主語）が三首（八･一％），ｃ（連用修飾）が三首（八･一％），ｄ（呼びかけ）が八首（二一・六％），ｅ（原因・理由）が〇首（〇％），ｆ（その他）が〇（〇％）である。やはり，表１で分類したものと割合はほぼ変わらない。ただし，歌謡には原因・理由を結句で表現

するうたがない。これは，ク語法止めは六句体までの歌謡にはなく，また歌謡全体でも二首（記四五・紀三七）しかなく，その上この二首は重出歌である。このように，ク語法が用いられないことも理由の一つかもしれない。

なお，d（呼びかけ）の歌謡の例をあげると次のようになる。

天飛ぶ　軽嬢子　しただにも　寄りて寝て通れ　軽嬢子ども　（記八四）

大魚よし　鮪突く海人よ　其が離れば　うら恋しけむ　鮪突く志毘　（記一一〇）

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　白橿が枝を　髻華に挿せこの子　（紀二三）

ぬばたまの　甲斐の黒駒　鞍着せば　命死なまし　甲斐の黒駒　（紀八一）

臣の子の　八重の唐垣　許せとや御子　（紀八八）

岩の上の　小猿米焼く　米だにも　食げて通らせ　山羊の老翁　（紀一〇七）

言痛けば　小泊瀬山の　石城にも　率て籠らなむ　な恋ひそ我妹　（常陸一）

愛しき　小目の小竹葉に　霰降り　な枯れそね　小目の小竹葉　（播磨一〇）

『万葉集』では結句の前で句切れがあり，結句の中でも句切れがあるという細かい句切れが存在した。しかし，歌謡においては，そのような複雑な句切れは紀二三・紀八八・常陸一以外見られない。しかし，体言止めにおける呼びかけの割合の高さは，『万葉集』の呼びかけの高さと変わらず，また，呼びかけの対象が人物を含むのは，『万葉集』と共通している。

5.　まとめ

前章まで，体言止めの特徴を見てきた。まず，体言止めは，『万葉集』や『古今和歌集』や『新古今和歌集』といった歌集におさめられているいわゆる和歌であろうと，歌謡であろうと，体言止めによってうたの感動を表現する場合が一番多いことは共通している。但し，その次に多い機能は，『万葉集』のうたと歌謡においては，呼びかけであり，その割合も突出している。その上，呼びかけの対象も，『万葉集』や歌謡では，人物も自然などの非人物もある。それに対して，『古今和歌集』や『新古今和歌集』は，例外を除いて，全て非人物を呼びかけの対象としている。

また，『万葉集』の体言止めは，短歌では七・二％とそれほど多くはないが，長歌は一三・六％と高く，更に旋頭歌では二一・〇％と非常に高い。旋頭歌の体言止めの割合の高さは，主題の提示と説明という歌謡の様式のためであろう。

一方，ク語法止めは，『万葉集』のみに見られる現象である。

このようなことより，『万葉集』の体言止めは，歌謡の体言止めに近いながらも，ク語法止めなどの独特の表現を有していることが指摘できよう。そして『万葉集』の時代は，和歌が歌謡から自立し，五音と七音による定型を確立しつつある時期であり，それまでの歌謡の様式を踏まえながらも，場に依存しない自立したうたへと変化しているために現れた特徴であった。

最後に，『古今和歌集』との関連で一つ述べたい。3で細かい句切れを有しているうたが，『万葉集』のうた以外に『古今和歌集』に一首だけあると指摘した。次のうたである。

こよろぎの礒立ちならし礒菜摘むむざしぬらさな　沖にをれ波　（古今　相模歌　一〇九四）

これは，『古今和歌集』巻二〇におさめられている東歌の中の一首である。『古今和歌集』の体言止めの割合は『万葉集』よりも低かった。しかし，この巻二〇においては，三二首中五首が体言止めであり，その割合は一五・六％と高い[xx]。これは，大歌所御歌の一つの特徴と言えるだろう。

また，『古今和歌集』の仮名序に「難波津の歌は，帝の御はじめなり」とし，「難波津の歌」すなわち，「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」を「歌の父母のやう」と位置付けている。この難波津のうたも結句が体言止めであり，結句の中で句切れがあり，第二句と第五句が同じ表現となっている。つまり，歌謡の特徴を有している。このようなうたを「歌の父母」とするのであるから，『古今和歌集』の時代においては，句中での句切れや呼びかけという表現は古態を有していると見られていたのではなかろうか。

---

i　古典ライブラリー，713頁（2014年）

ii　「八代集の体言止」和歌文学会編『和歌文学の世界　第十集　論集　和歌とレトリック』笠間書院，149～168頁（1986年）

iii　『短歌撰格』（下），菅原屋茂兵衛他（1885年）1オ～5オ

iv　iii本「こゝに又實語虚語を試みんとて，其わかちたるやう，先づ天地の間，ありとあらゆる物の限りをば，時候，處位，事藝，物形と四つに約め分ちて，是を實語とす」1ウ～2オ

v 武内章一・井上寿彦・加藤英夫・小池光・山口邦子「二十一代集における体言止めについて」『名古屋大学国語国文学』九号，41～58頁（1961年）

vi 「八代集体言止めの歌の性格」『富山大学文理学部紀要』十一号，40～54頁（1962年）

vii 「短歌形式の文法と表現」『国語国文』三十五巻第六号（三八二號），464～474頁（1966年）

viii 「いはゆる体言止めについて」『文体論研究』九号，8～20頁（1966年）

ix 「体言止めの類型と変遷－万葉・古今・新古今・風雅集について－」『国文』（お茶の水女子大学国語国文学会）第四十五号，44～55頁（1976年）

x 「万葉集における体言終止」『芦屋ゼミ』第六号（1982年）

xi ⅱ論文

xii 「人麻呂歌集旋頭歌「山背の来背」二首について－集団的歌謡の一側面－」『古代研究』第三十七号（2004年），「『万葉集』巻十一巻頭二首の歌謡性」『日本歌謡研究』第四十五号（2006年）

xiii 「～なく」・「～なくに」といういわゆる「ナクニ止め」は「く」が名詞化させる接尾語であるので，「～なく」のみを対象とし，「～なくに」は「に」が助詞となるので，対象から外し，同様に他のク語法についても，同様に「～く」のみを対象とした。また，係り結びや疑問詞などの呼応により歌末が連体形になったものも対象から外した。連体終止は，上に係助詞が無く，格助詞「の」や「が」でその主格を提示していないもののみを対象とした。なお，％は小数点第二位を四捨五入したものである。

xiv ⅱ論文

xv ⅹ論文

xvi 但し，『新古今和歌集』の「やほか行く浜のまさごを君が代の数にとらなん$\boxed{\text{おきつしまもり}}$」（七四五　後徳大寺左大臣）のみ，「おきつしまもり」という人物を呼びかけの対象としている。これは，本歌である『拾遺和歌集』の「八百日行く浜の真砂と我が恋といづれまされり沖つ島守」（恋四　八八九　よみ人知らず）が，『万葉集』の「八百日行く浜の砂も我が恋にあにまさらじか$\boxed{\text{沖つ島守}}$」（④五九六　笠郎女）の異伝歌であるためと考えられる。

xvii 「～く」「～なく」というク語法止めは，そのうたに句切れが無い場合は感動を表わすことが多く，句切れがある場合には「～なので」もしくは「～なのに」という原因・理由を表わす働きをする。従って，『古今和歌集』にはそのク語法止めがない上に，『古今和歌集』時代に多くみられる原因・理由を表わす「ものから」「ものゆゑ」が助詞であるために『万葉集』に比べて原因・理由を表現する体言止めが少ないのかもしれない。

xviii なお，「～なくに」「～くに」という語法も，働きとしては「～なく」「～く」も同じであり，『古今和歌集』には「～なくに」が一六例，「～くに」が一例あるが，すでに『古今和歌集』の時代に「なくに」という語法自体，古いものと見なされており，ク語法止めが『万葉集』の一つの特徴であることには変わりない。また，『新古今和歌集』には用例はない。

xix 「第三章　民謡の様式」「第七章　古代歌謡の様式－詩歌起源論のために－」『古代歌謡論』，三一書房，（1960年），95～151頁，275～348頁

xx 前掲武内論文 の指摘するように，体言止めは，季節歌に多く，恋歌に少ないという傾向はあるが，その多いと言われている季節歌でさえ，三六二首中二六首しかなく，季節歌全体の七・二％でしかない。

＊本文は，『万葉集』はCD-ROM版『萬葉集』，塙書房，2001年のそれを，歌謡は小西甚一他編『古代歌謡集』，岩波書店，1957年のそれを，その他和歌に関してはCD-ROM版『新偏　国歌大観』，角川書店のそれによった。